

新體幼稚園唱歌の歌ひ方

東京女子高等師範學校教授
小松耕輔

日本の旗 日の丸の旗

先般倉橋惣三先生の作詞によつて私が作曲した「日本の旗 日の丸の旗」について教授上必要と思はれるふしぶしを次に略記いたします。歌詞は次の通りであります。

日本の旗
日の丸の旗

明田の色

朝日の色を
赤く染めて

日記の書

卷之六

日本の旗

高く立てよ 高く立てよ

以上の如くであります。

元來我が國に於ては、國旗掲揚の場合には「君が代」の國

歌奏樂裡に竿頭に掲げるのであります、幼稚園等に於て

もつごくだけた氣持で揚げたい云ふ氣持は誰でも持

である。この歌が豊か無む。陣隊等に於ては莊嚴なる國歌奏

になつてやらむが、最後のへり返しの場合には
i i 6 | 5 6 5 0 | 5 6 5 | 3 2 1 0 |

樂の中に掲揚されるのは最もよろしいのであります。

此の歌詞を讀むに、その構成について誰でも氣づくが、は、最初の一、二行、即ち「日本の旗、日の丸の歌。高く立てよ、高く立てよ。」の文句は最後にそのまま繰返されてります。それ故この歌詞は長いやうに見えますが、實は五行の短い歌になつてゐるのです。

作曲の場合もこのこゝを考へて同じやうな節でくり返してをります。唯最後の節のくゝりをつけるために少しづかへてあります。即ち初めの三、四行は

カタカタテヨ カタカタテヨ

1. 165650 5653210

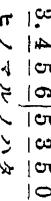
こなつてをりますが、最後のくり返しの場合には

だあたいの思ひおもか。

子供は同じ調が出来ぬし、からしても前の節で歌ひたがります。それ故方便にしては最初の一一行と最後の一一行を比較して子供に教へてしまふのも一方法あります。

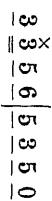
それから全體の曲について申しますが、初めのニッポンノベタのニッポンハタシモリですが、ニッポンハタシモリの「ラ」を呑んでしまつて歌ふのであります。ニーベンハタシモリにしたが思ひおもか。

その次のルーハタルノベタのソーリでは、



ヒノマルノベタ

でありおもかがわよついわぬいぶのやへとなりたがりおもかかの御注意ください。

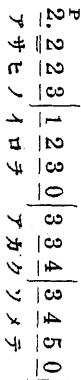


ヒノマルノベタ

それから八分休止符は時長だけ完全に休むして下さい。

次に樂譜の二段目の初めアサヒノイロチのソーリですが、

これは、

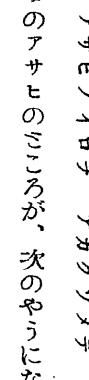


アサヒノイロチ アカクソメテ

これが八分休止符は時長だけ完全に休むして下さい。

次に樂譜の三段目の初めアサヒノイロチのソーリですが、

これは、

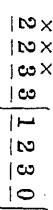


アサヒノイロチ アカクソメテ

これが八分休止符は時長だけ完全に休むして下さい。

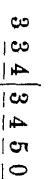
この處が次の節に直ぐつゝおもかから、一矢息をつぐや

御注意へおれど。



かうなるが、何とも平凡になつてリズムがないはれまち。

音程を附點音符に御注意願ひおもか。
かゞ次の

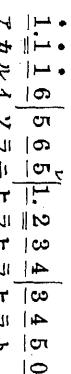


アカクソメテ

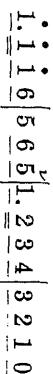
は、なんでもないやうに見えますが、音程がくづれおもか。

ルーハタルノベタの半音が一度のルーハタルノベタで
音程が狂なやすいのであります。此處は少しづゝ強くなつてあるおもか。

その次の二一行が此の曲の中心であらむ。



アカルイソラニヒラヒラヒラト



ルーハタルノベタ

此處は元氣に強く歌つてほしソーリ歌ひおもか。この二一行は

初めは上行的な樂句で次は同じやうな節をくり返しますが、終りのソーリが下行的な樂句になつてしまひます。この対照をはつきり子供に會得なしください。それから息の處が次の節に直ぐつゝおもかから、一矢息をつぐや

うにして、息つきの處の間がのびぬやうに注意してください。此處でも矢張り附點八分音符を十分時長を保つやうにしてください。この邊で旗が旗竿の七分目位のところへ達するやうにありたいと思ひます。

此處がすむき、再び最初の節が出てまゐりますから、落付いた氣持になつてゆづくりと歌ひ出してほしいと思ひま

す。そして最後のタカクタテヨ、タカクタテヨのところ、うつかりするご子供は最初の節になりたがります。此處を十分御注意願ひたいと思ひます。このおしまひで、ピタリと旗が竿上にひるがへるやうにしたいと思ひます。

歌詞はあまり歌謡調子にならぬやうに、むしろ言葉のままで朗讀的に歌はれることを希望いたします。

○

暮の二三日を軽い風邪氣味で寝てるながら、ふと思つたことでした。

いろ／＼のところで、いろ／＼の子どもが、いろ／＼な年を迎へるであらうと。そのなかで、温く、明るく、樂しくもあるまいと思はれる子ども達の方が、次から次へと、想像の目の前に見えて來るのでした。
病院の白い壁、白いベット。そこにほそ／＼と、蒼白い顔に眠つてゐる子ども。その目には長いまつげが見え、その額には青い血管が浮いてゐる。いま、附添ひのお母さんは、一寸、どこへか行つたか……私は寝がへり打つた。
きたない長屋の一室。なんといふがランとした室が。さむ／＼と障子の破れ紙が風に動いてゐる。黒い瀬戸物のこわれ火鉢には火がない。それどころか灰も底に沈んで固まつてゐる。そのそばに、寝てる母親。その傍に泣いてゐる子ども。父親はどこへ行つてゐるのか……私は寝がへりを打つた。

そこは、どこか私の未だ知らない土地である。あたりは騒しい人聲に何を言ひ争つてゐるのか。人々は皆怖れと飢えとに身をふるわせてゐる。その横の方のごみの山の傍に二人程子どもがゐる。遊んでゐるといつていいのか、唯しやがんでゐるといつていいのか。兎に角く、動く元氣も、笑ふ元氣もない子ども達である。そこへ、通りかゝつた日本の兵隊が、急がしい足を一寸止めて、軍服のポケットから何か出して、その子等に與へた。その子等は黙つて、それを貰つて、それでも、一寸頭を下げて何を言つてゐるらしい。が、それは支那の言葉で、私には分らない。……
私は、また寝がへりをうつた。